大学アーカイブズにおける学生の位置付け
—創価大学の学生出版物を手がかりにして—

中　村　顕一郎

はじめに
1　大学アーカイブズにおける「教育」的機能
2　創価教育研究センターにおける大学アーカイブズ機能
3　大学アーカイブズにおける学生——
　『創価大学三十年誌〔学生編〕』の刊行と「創価大学学生資料館」の開設とからヒントを得て
おわりに

はじめに

近年、大学アーカイブズへの関心が高まっている。2005年現在において『日本の大学アーカイヴズ』が発刊準備中であることは、その好例といえるだろう(1)。大学アーカイブズと聞いて一般的に連想されるものは、大学当局が生み出す記録であり、それを収集・保存・活用する機関である。大学を運営するにあたって、大学当局によるアーカイブズの管理は死活問題であり、今後もその重要性が失われることはない。大学が日々創出する記録史料を、いかに収集し、分類し、保存し、活用するのかということに関しては、数多くの先行研究が存在している。

しかしながら、大学アーカイブズは、大学当局の生み出す記録史料や、大学に所属する職員や教授、創立者等の残した記録史料のみで完結するものではない。当然のことながら、大学の主体はあくまでも学生であり、学生なしには大学は一日たりとも存在することはできない。大学というものは、創立の日より現在までの、教員と学生たちとがそこで過ごす、一日一日の集積体で成り立っている。『大学の起源』の著者であるハスキンズは、「大学の発生の誘因は学問の大復興」(2)が原因であり、「喜んで学んで喜んで教えようとする」「教師と学生の組合」が「最初のそして最良の定義」(3)であると述べている。大学において、学生がどのように生活し、何を学び、何を生み出したのかという歴史を、資料を収集して保存、管理、さらには活用していくということは、大学アーカイブズを考える上で、避けて通れない問題であると考える。

そこで本稿では、大学における「学生」をキーワードとして、大学アーカイブズに関するささやかな研究を試みたいと思っている。言いかえれば、それは、大学アーカイブズにおいて学生というものが、いかなる役割を持つのかということを考察することである。

よって本稿の研究課題を、以下三点に設定する。第一に、大学アーカイブズに関する先行研究を参照しながら、学生と密接な関係を持つであろう、大学アーカイブズの「教育」的機能を検討する。第二に、大学アーカイブズが「教育」的機能を十全に発揮する上で重要と思われる、学生という視点を取り入れた大学アーカイブズというものを考察する。その事例としては、創

Ken'ichiro Nakamura（創価大学大学院博士後期課程）

価教育研究センターを取り上げる。第三には、以上の内容から見えてきた、大学アーカイブズにおいて学生の果たす役割というものを検討する。そのために、実際に学生の手による大学アーカイブズを構想した創価大学学生自治会の活動を考察する。

１　大学アーカイブズにおける「教育」的機能

大学アーカイブズに関しては、当然ながら種々の見解がある。まず一般的な意味を確認しておこう。

「大学アーカイブズ」の定義を見るに、『文書館用語集』には、「大学史料を保存し公開する機関。日本では自治体の場合と同様、大学でも大学史編纂は盛んに行われているが、大学の文書館（アーカイブズ）は少ない。大学史料館・大学史料室と呼ばれることが多い」(4) とあり、『アーカイブ事典』には「諸外国の大学の多くには、大学アーカイブ（文書館）があって、各大学が果たした学問研究の足跡、組織体としての大学の研究教育体制の沿革を記録するとともに、学術的研究の成果、遺物、沿革資料、関係者の文書などの整理・公開・研究をその役割としている」(5) とある。

簡単に事典上の意味を押さえてはみたが、それではより具体的に、大学アーカイブズはいかなる史料を「整理・公開・研究」するのであろうか。大学アーカイブズに関して詳細な研究を行っている寺崎昌男によれば、大学アーカイブズは以下のような史料を収集する役割があるとされている。すなわち、「（１）大学運営の歴史を示す公的文書、簿冊、事務記録、その他の文書」、「（２）大学内諸機関の議事録、意見書、答申、報告書等」、「（３）大学の刊行する年報、要覧、雑誌、新聞、広報紙誌等」、「（４）大学卒業生の卒業証書、アルバム、講義ノート、伝記、書簡等々（とくに当該大学に関係あるもの）」、「（５）学長、学部長、教授、職員等の私蔵する文書類のうち、とくに大学に関係するもの」、「（６）大学設立者、寄附者、卒業生など関係者の文書」、「（７）大学の歴史を示す記章、門標、記念品、トロフィー、旗、制服、制帽、印璽等々の物品」、「（８）大学に関する写真、テープ、ビデオテープ、フィルム等」、「（９）大学史に関する諸刊行文献」、「(10) 学問史的な意味をもつ実験器具、研究室製作品、報告書等」であり、基幹部分は（１）から（６）等の文書資料であるが、それに限定されずに（７）から（８）のような記念的物品や視聴覚資料も収集・保存するところに大学アーカイブズの特色があると寺崎は述べている (6)。

以上のような多様な史料を、大学アーカイブズとして収集する目的とは何なのか。さらに寺崎の研究に聞こう。寺崎は大学アーカイブズの意義を、沿革史を編纂するという従来の目的に加えて、第一に、「大学という文化的機関の活動の記録を証する史・資料の収集を通じて、一国の文化史・学問史・教育史の資料庫を形づくる」、第二に、「政治史、社会史、学問史の研究のための、かけがえのない宝庫となる」、第三に、「卒業証書、在学、在勤の証明書類の保管を通じて、個人の履歴の確認、保存に役立つ」(7) と述べている。それに付け加えて2001年の段階では、大学アーカイブズ設置の追い風になる要素として、「とくに国公立大学に関して、情報公開法の制定（「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」平成十一＝一九九九年）の影響」(8)、「この数年間顕著になってきた大学の『アカウンタビリティー』への倫理的社会的要求の高まり」(9)、「大学史編纂や資料保存・収集・整理・公開といった一連の仕事」が、「まさにそれぞれの大学が自校の個性を証明する不可欠の作業」であるということ、の三点を掲げている (10)。そして、それにとどまらず、これらに加えられるべき新しい要素として、「大学アーカイブズは、たんに学術用にあるのではない。『研究』とともに『教育』の機能を持つことが期待される。」(11)

と述べ、大学アーカイブズの未来に対して、いくつかの展望を示している。

さて、本稿においてとりわけ取り上げようと考えているのは、第四番目に言及されている「教育」の機能である。なぜならこれは、「研究」と「教育」とを切り離すことが出来ない、大学におけるアーカイブズならではの機能といえるからである。実際に「自校史教育」を開始している大学も多く存在し(12)、一例を挙げれば、立命館大学（2002年開講）、明治大学（同97年）、京都大学（同99年）、立教大学（同99年）、名古屋大学（同99年）、広島大学（同01年）、九州大学（同97年）といった大学が、自校の史料編纂に関わった教員などを講師として自校史の講義を開講している(13)。大学アーカイブズに、史料の収集・保存・活用・研究といった既存の機能に加え、「教育」的な機能が期待されているということは、何を意味するのだろうか。

そこでまずは、大学アーカイブズにおいて非常に高い評価を受けている京都大学大学文書館を例にとって考えてみよう。寺崎が以上の論稿において紹介している「京都大学大学文書館の設置提案」には、「本学を含めた従来の日本の大学が、史料にもとづき、自らの存在理由についてどれだけ考えてきたかとなると、実は甚だ心もとないのではないだろうか。大学組織の巨大化、学問分野の細分化によって、大学のあり方を歴史的、総合的に考える場が存在していないのではないかという疑問を感じざるをえない。このような場として期待されるのが大学文書館であると考えられる。収集した史料を基本に、自らの大学の歴史や大学のあり方についての研究・教育のセンターとして、学内外にさまざまなメッセージを発信することによって、本学にとって文書館は継続的、恒常的な自己点検の場となると同時に、所蔵史料を公開することによって、第三者からの評価にも応じられる開かれた場となるであろう。」(14) と述べられている。

大学アーカイブズは、「大学のあり方を歴史的、総合的に考える場」を目指していこうという京都大学大学文書館の理念は傾聴すべきものである。実際に同大学文書館は、「資料の収集・整理・公開」「調査・研究」とともに、「広報・教育」という役割を標榜し、具体的実践を行っている(15)。

さらに、全国大学史資料協議会・研究叢書第３号の『大学アーカイブズの設立と運営』には、名古屋大学の大学アーカイブズ構想が論じられているので引用してみよう。その構想の第一は「大学基盤施設としての大学アーカイヴズ」(16) であり、第二は「各種アーカイヴズの中核的拠点としての大学アーカイヴズ」(17) であり、最後に第三として「教育研究機関としての大学アーカイヴズ」である。本稿のテーマと深く関わりのあると思われる、第三の構想をさらに詳しく述べれば、「第１は、大学史研究の成果を活用した自校史教育（大学史教育）」、「第２は、新たな教養教育としての記録史料学教育」、「第３は、開かれた大学としての生涯教育」としての「本学退職者および卒業者はもとより、広く一般市民の生涯学習要求に応えるための公開講座あるいは資料展示等」(18) である。名古屋大学の大学アーカイブズにおいては、大学アーカイブズの教育的機能が、自校史教育のみならず、記録史料学を共に学ぶ場として、さらにはそれが広く社会に開かれた生涯教育の一環として、役割を果たす可能性を示唆するものである。

以上、大学アーカイブズの「教育」的機能に関して、興味深い二つの事例を概観した。大学全入時代を迎えつつあり、各々の大学に独自性や卓越性が求められている現在において、さらには大学というものが、大学に所属する学生のみならず、学びたいと希望する全ての人に開かれた存在であることが望まれている現在において、大学の存在理由や存在意義を広く大学内外に発信していくために、「教育」的機能が重要視されることは時代の趨勢ともいえよう。大学アーカイブズが史料の収集だけではなく、「教育」的活動を行っていくということは、今後の大きなテーマとなるであろうが、ここで問題となるのは、その「教育」というものに対する考え方

である。

大学で集めた史料を公開し、その史料をもとに大学史を編成しなおして、学生に講義し、広く一般社会に伝えていく。この作業は非常に大切なことであり、これからも永続的に実施されなければならない。この重要性を考慮しつつ提示したいのは、大学アーカイブズにおける教育が、歴史的な批判を加えないままで学生に施されるのではないかという危惧を踏まえた上での、大学アーカイブズへの新しい視点である。

そのために検討してみたいのは、日本近現代教育史を専門とする佐藤秀夫の「戦後教育改革に関する資料と研究」と題する研究部会（『大学アーカイブズ』第８号所収）における、高等教育史及び大学史編纂に関する発言である。佐藤は大学アーカイブズのあり方（なかんずく教育のありかた）に対して、これまでの日本の大学史及び大学史編纂の歴史を踏まえた上で、極めて興味深い内容を述べている。以下、少々長くなるけれど引用してみよう。

「大学史では普通学校以上に「歴史肯定」ものが多いように私には思えるのです。歴史研究や教育史研究では、優れて批判性を持っている筈の研究者が執筆の中心におられるにもかかわらず、その大学の果たした歴史上の問題性や問題構造をきびしく指摘せず、できる限り肯定的に「粉飾」しようとするものが多いようです。私は、その根底に、学問研究の府としての大学は「本質的に」「善なるもの」ととらえる意識が働いているように思えるのです。ときどき大学の内面改革に関連して、「大学にする」「大学になる」と表現されるその「大学」観です。そういう文脈において、「小学校になる」「中学校にする」といった表現は、まず存在しないでしょう。／そこには「学問の府」と「教育機関」とを断然格差あるものとして捉える意識が潜んでいるように思えるのです。（最近の大学大衆化傾向を指して「大学も学校になった」と嘆く向きもかなりおられます。私は発生の昔から大学は「学校」に他ならなかったと確信するのですが）。「学問と教育との分離」を歴史的に批判する進歩派が、です。日本の普通教育戦前・戦後史を調べている立場からすれば、普通教育史をバラ色に描くには、逆にある種の「勇気」がいるでしょう。それに比して、大学史や高等教育史を「加害」の観点から叙述したよりも「受難」史として描くものの、何と多いことか。／やはりこの国の現状ではまだ「学問」と「教育」とは厳然と区別されているようですね。」(19)

佐藤の指摘するように、これまでの大学史編纂や大学アーカイブズで構築されてきたものは、どちらかといえば、大学当局や大学に所属する教員もしくは大学史研究家などが大きな役割を果たし、無批判に大学の歴史を受け入れ、その学問成果を学生に教育してきたのではないだろうか。そのような無批判の前提の下で広報活動や教育活動を行ってみても、大学の抱える問題点を改善していく視点は生まれるはずもない。

そこで、佐藤の考察する大学史編纂の無批判性、「受難」史、「学問と教育との分離」といった問題を乗り越えるひとつの方途として、大学の歴史それ自体を相対化するために、「学生からみた大学像」というものを考えてみることは無益ではないだろう。大学に所属する最も大きな勢力は当然ながら学生であり、その学生のために大学は運営され、研究を行っているはずである。たとえば明治大学元学長の木村礎は「2001年10月３日全国大学史資料協議会2001年度総会ならびに全国研究会・記念講演」・「大学史および大学史料を考える」において、これまでの大学史のあり方に批判を加え、学生の歴史を残すことの重要性や、大学史における騒動や紛争から眼をそらさないことの必要性について述べている(20)。

現在の大学アーカイブズの研究成果を踏まえて、その質を向上させていくためには、学生の存在が無視されていない大学アーカイブズを目指す必要性があると考える。しかしながら学生

の視点を取り入れたり、学生に関する資料を収集したりしても、大学アーカイブズに何の利益もない、という批判もあって当然である。もとより、本稿は大学アーカイブズにとって、学生という視点がどうしても必要であるということを論証するものではない。そうではなくて、大学アーカイブズにおける一つの見方として、学生という視点を取り入れ、複眼的に問題を考察していく方途もあってもよいのではないか、ということを提案するに止まるものである。

そこで次節では、その学生の資料、学生の活動に焦点を据えた大学アーカイブズを構築しようと試みている、創価教育研究センターに考察の対象を移す。創価教育研究センターという一つの事例を通して、この問題を考究してみよう。

2　創価教育研究センターにおける大学アーカイブズ機能

本節では、前節で見た「教育」的機能を踏まえ、学生の視点を取り入れた大学アーカイブズというものがいかなる可能性を持つのかを考察するために、創価教育研究センターを一事例として取り上げる。同センターの持つ大学アーカイブズ機能を概観していくことで、その中で学生が果たしている役割に関しても、同時に明らかにしていけると考える。

まずは創価教育研究センターの目的と事業内容とを、簡単に確認しておこう。創価教育研究センターは「本学の歴史並びに創立者池田大作先生及びその淵源たる牧口常三郎先生、戸田城聖先生の創価教育の思想と実践の研究を行い、本学の発展に資すること」を目的として、この目的の達成のために「（1）資料の調査収集、整理、保存及び管理」、「（2）資料の公開、展示及びレファレンスサービス」、「（3）資料の研究及びその成果の発表」、「（4）研究成果の教育活動への還元」、「（5）講演会、公開講座、シンポジウム、セミナー等の開催」と、その他目的達成のための事業を行う機関として設立された[21]。同センターは、創価大学創立の経緯と、牧口・戸田・池田の「創価教育の思想と実践」に関する研究を行い、それを後世に伝え、大学を発展させることを目指すものであり、創立から約29年７カ月後の2000年11月16日に創価大学創立30周年の記念事業として、大学付属施設として開設されたのであった。

それでは、創価教育研究センターにおける大学アーカイブズの機能についての検討に移ろう。本稿は、大学アーカイブズにおける、学生の果たす役割に関する考察を目的としていることもあり、同センターにおいての大学に関する資料収集機能及び教育・研究機能の二つに限定して考察していく。保存や利用に関する機能については、今後の研究課題とする[22]。

まずは資料収集機能に関して検討してみよう。創価教育研究センターは、上記で述べた目的を達成するために、資料収集に関して以下の二つの活動を推進している。第一に、「創立者池田大作先生の思想・行動をはじめ、牧口常三郎・戸田城聖先生の様々な資料を収集すること」であり、具体的にいえば、「これまで未発見だった牧口先生の論文や、戸田先生の著作の収集、書簡や関係者の証言をまとめるといった作業である。また、池田先生の膨大な論文や内外の著作を全て一同に集めることも大きな柱」[23]としている。第二に、「創価教育の実践の場でありその原点でもある「創価大学」自体の歴史を残していこう」ということであり、「創価大学がどのような精神に基づいて設立され、いかなる歴史を刻み、何を果たしてきたのか。こうしたことは、後世に残していかなければならない重要な事柄だと思われる」[24]としている。以上のことからも了解されるように、創価教育研究センターの資料収集機能は、創価大学設立の淵源たる牧口、戸田、池田に関する資料を収集すると共に、設立後の様々な大学関係資料を集める機能を目指しているといえよう。

そこで続いては同センター所蔵の創価大学に関する資料について考察していく。同センター

が所蔵しているのは、大学設立に関する資料、大学の要覧、講義要項、大学当局の出版物、大学の紀要等々であり、前述の寺崎が提起している10項目に関しては、継続的に収集を行っているといえる。大学当局が日々生み出す文書を収集するシステムに関しては、これから確立する段階であるといえよう。半現用・非現用になった大学当局の文書を、計画的に収集し、保存し、大学運営に活用していくという大学アーカイブズの機能は、未だ十分に果たしてはいない(25)。

それでは創価教育研究センターが構想している大学アーカイブズにおいて、特異なものは何かと考えれば、それは大学創立以来の、学生に関する資料を収集しているということである。創価教育研究センターが所蔵する学生に関する資料は、大学創立当初から学生が出版してきた新聞・雑誌や、１期生から34期生にいたるまでの、学生の卒業文集や様々な行事で配布されたチラシ類、パンフレット類、大学祭関係資料やその運営資料、学生が出版してきた創立者のスピーチ集や、学生が作った大学史に関する著作等々、学生に関係する多種多様な記録史料が保存されている。中でも、1971年の創立当初からの学生のクラブ等の出版物に関してデータ化されているものは、約1400点にも及んでいる。

創価教育研究センター所蔵の、学生が作成した新聞やクラブ誌、行事のチラシ等を手にとって閲覧していくと、そこには、当時の時代背景や学生の生活が如実に反映されていることがわかる。大学当局が生み出す資料に加えて、大学で学び、生活した学生の状況を次世代に伝えていくことは、学生に関する資料や、学生が実際に作成に携わった資料の役割であろう。これらの収集が可能であったのは、大学関係者、卒業者、在学者といった多数の人達の協力があってのことであると神立孝一創価教育研究センター長は述べている(26)。創価教育研究センターの大学アーカイブズ機能は、研究者、大学職員、大学に所属する学生、卒業生といったあらゆるの人達の力を結集して、発展してきたといえる。

それでは創価教育研究センターは、いかなる研究・教育活動を行っているのだろうか。資料収集機能に続いては、研究・教育機能について考察してみよう。同センターは設立されて以来、上に述べた創価教育研究センターの規程における目的に沿った、研究活動・教育活動を行ってきている。具体的内容を知るために、筆者なりに大まかに①講演会やシンポジウム、学生への講義の開催、②大学内における展示会の開催、③出版活動、④調査活動、⑤収集資料のデータベース化、に分類して、議論を進めていく。

紙幅の都合上、これら全てを詳細に述べることは不可能であるため簡潔に述べてみれば、①に関しては「草創の大学を語る」「草創の創立者講演を読む」といった講演会や、牧口・戸田・池田の研究に関する講演会およびシンポジウムを開催している。②に関しては、池田の著作のうち海外で翻訳されたものを集めた「創立者著作翻訳書籍1000冊展」と「創立者著作翻訳書籍1300冊展」を2004年３月から９月にかけて、創価大学にて開催した。数字を見てもわかるように、３月の時点において1000冊という規模で開始された展示会も、９月には1300冊となった。恒常的に資料を収集するシステムが構築されているといえる。翻訳された池田の著作は、43カ国・32言語に及んだ。③に関しては『創価教育研究』と題する研究紀要を2002年（創刊号）、2003年（第２号）、2004年（第３号）に出版している。ここでは創価教育研究センターでの研究成果が、論文や目録といった形で掲載されている。④に関しては、創立以来の大学の地名調査や、建築物の写真撮影による保存、各年代による大学の様子の復元、創立者が作成した揮毫の調査等を行っている。⑤に関しては、②で述べた池田の海外翻訳書籍の目録化、日本語書籍の目録化、雑誌や新聞に掲載された記事の目録化も継続して行っている。大学史資料に関しても、同様に目録化を行っている。

非常に簡単にではあるが、創価教育研究センターの資料収集機能と研究・教育機能とを概観してきた。資料収集機能に引き続いて、ここでも述べることができるのは、これらの研究活動や教育機能というものは、当然のことながら、学生を念頭において企画立案し、実践されるということである。講演会にしても、展示にしても、出版活動にしても、大学外の一般の方も対象になるのは当然ではあるが、まずは学生が対象に据えられている。(そのために、創価教育研究センターの企画は学生が参加できる時間を考慮して大学内で行われることが多い。)

その理由としては、創価大学及び創価教育研究センターがまだ比較的若い機関であることが挙げられるだろう。創価大学は2005年で開学35周年、創価教育研究センターは2000年に開設されて6年目である。創立されてそれほど時間がたっていない大学ゆえに、大学の歴史についての決定した見解は少なく、大学の理念を学ぶにしても、完成されたものを学ぶというのでもない。それゆえに、大学アーカイブズとしての機関も、自分たちで一から何もかも創造しなくてはならなかったといえる。創価教育研究センターが資料を収集し、研究・教育的機能を持つというときには、それは共に研究するメンバーを募るということであり、学生も職員も教員も卒業生も、共に創価大学に学ぶ学生として、大学の淵源や創立者の思想に関する資料を一緒に収集し、そこから何かを研究するということを意味する。共に学ぶ連帯を築いていくということが、創価教育研究センターにおける「教育」的な機能といえる。それゆえに、創価教育研究センターの活動は、おのずから学生を対象に据えて行われてきたのではないかと推察される。

以上、創価教育研究センターにおける学生出版物と、同センターの「教育」的機能について見た。同センターの大学アーカイブズ機能にとって、学生というものが重要な位置を占めていることは明らかである。もちろん、創価大学アーカイブズにおいて学生に関する記録史料が、意識的に収集され、保存されてきたから、他の全ての大学においてそれが重要だと結論することはできないことは当然である。しかしながら、大学アーカイブズにおいて学生の存在を等閑視しないという一つの事例の存在は、大学アーカイブズにおいて興味深いものだと考える。

本節では、創価教育研究センターの事例を元に、大学アーカイブズに学生という視点を加えて、その可能性を検討することを試みた。しかしながら、当の学生たちに関しては、いまだ何等考察を加えていない。実際に出版物を刊行している学生はどのような背景の下、それらを作り出したのだろうか。そこで、次節においては、大学に現に学んでいる学生に焦点を当てて、議論を進めていく。

3　大学アーカイブズにおける学生—『創価大学三十年誌〔学生編〕』の刊行と「創価大学学生資料館」の開設とからヒントを得て

本節では、実際に大学に学ぶ当事者たる学生の立場から大学アーカイブズというものを眺めたときに、いかなる視点が生まれ得るのかを考察する。その問題を、実際に大学アーカイブズを視野に入れて活動を行ってきた、創価大学学生自治会の事例にヒントを得ながら、考えてみよう。

創価大学学生自治会は、1972年に設立されてから2005年の現在に至るまで、新聞や創立者のスピーチ集、機関紙の出版活動や自主講座の開講等、大学アーカイブズに関係する多くの事業を行ってきている[27]。具体的な一例を挙げれば、創価大学学生自治会は、第三回入学式の当日（1973年4月9日）に、初の創立者の講演が行われる際、今までの創価大学に関する創立者の発言・スピーチをまとめた『二十一世紀の潮流』という31頁の小冊子を作成している[28]。学生の学習意欲が、一つのパンフレットとなり、これが現在まで継続している創立者のスピー

チ集の発刊の淵源となっている。

その後も『二十一世紀の潮流』は増補・改訂を繰り返し、1981年には、創立十周年版の『創立者の語らい』として発刊された。その後も十五周年版、二十周年版と増補を重ねて、1995年からは新書版の『創立者の語らい』が出版されている。そして2000年には三十周年記念版の『創立者の語らい』（上・中・下）が発刊されており、『二十一世紀の潮流』『創立者の語らい』という創立者スピーチ集の学生による発刊は、2004年現在までに15種類に及ぶ[29]。

この創立者のスピーチ集は1978年と1987年とに学生によって英語に翻訳されている。それに続いて、韓国語版が、卒業生によって2002年に翻訳された。2004年には、留学生を中心とした学生の翻訳グループによって、日本語と英語との対訳版『創立者の語らい』が作成された[30]。

これらの学生による大学アーカイブズ構想の一つのかたちとも言えるものが、これから述べる創価大学三十年誌編纂委員会による『創価大学三十年誌〔学生編〕』（以下『三十年誌』と略記）であり、後に記述する「創価大学学生資料館」の開設と、その資料館による『学生自治会30年の歩み　通史篇』の発行である。

『三十年誌』は、学生が大学創立以来の大学史に関する資料を収集し、学生の視点から大学史を記述したものである。この本の「発刊の辞」は、学生の立場から見た大学アーカイブズということを考える上で参考になるため、長文ながら以下に引用する。

> 「創立三十周年――世界の大学史、あるいは近代日本の大学史から見ても、ずいぶんと幼いキャリアに違いありません。しかし、どの大学にとっても、初発の三十年は最もエキサイティングなドラマに満ちた時代であったと思われます。若い大学にいる私たちの幸福とは、まさにそのドラマを「現在」として生きたという一点に尽きます。創価大学の三十年は、静的な過去として扱うにはまだ熱が冷めていない、私たちの現在と地続きの時間に他なりません。／それを踏まえて、私たちは、本書のスタイルを「大学史」ではなく「大学誌」としました。もちろん本書は公式の歴史書でも客観的な研究書でもなく、かといって、フィクションを前提とした物語というわけでもありません。あえて本書の特質をいえば、それは学生の編になること、それ自体に求められます。本書では、本文中において創価大学を「本学」と呼ぶことは原則として避けられていますが、このことは本書の性格の深い部分に起因しています。本書の編纂主体者である私たち学生は、大学の当局者でも、部外者でもありません。人生のある一時期を確実に当事者として過ごし、やがて社会へ旅立つ学生の存在を、創価大学は大学の主体者として位置付けようと試みてきました。「学生を主役に」――このテーマは、創立者池田大作先生の願いを源として、大学のさまざまな局面において表現され、大学と学生・卒業生との関係に新しいモデルを確立しつつあるといえるでしょう。本書の編纂もまた、この願いの延長上にあります。学生が大学の主役であるならば、大学とその歴史を語る言葉もまた、学生独自のものが生まれなければなりません。もちろん、学生に限らず多くの関係者の協力がなければ本書が存在しないことも事実です。」[31]

ここには大学の当事者であり、主役であるべき学生が、当事者の目で大学の歴史を残そうとしたことが記述されている。「部外者」でも「当局者」でもない「当事者たる」学生たちが、「学生が大学の主役」であるならば、大学史の記述にも「学生独自のものが生まれなければなりません。」と述べる一文を見るとき、専門家の視点は欠かせないとしても、その大学に生きたど素人である学生の視点もあって然るべきではないかと思われる。

さて、ここからは『三十年誌』がいかなる内容であったのかを検討してみよう。それによって、学生がどのような資料を収集して、大学誌を纏め上げたのかが解明されると考える。次い

で、その資料収集と、編纂作業の延長線上にある「創価大学学生資料館」の開設と、その自治会活動を自ら編纂した『自治会30年の歩み　通史篇』(32) の内容とから、学生自治会における大学アーカイブズ構想について考察する。

それでは、『三十年誌』の具体的な内容を概観していこう。第一章は「創価大学30年史　年度別ダイジェスト」と題して、30年間の主要な出来事を一年毎にまとめている。第二章は「建学の理念」と題した牧口・戸田・池田の思想に関する研究である。第三章は「人間教育の作業場――教育と研究」として、各学科やカリキュラム、通信教育部、大学院、図書館、研究所等々についての解説を行っている。第四章は「知のグローバル・ネットワーク――海外交流」として協定を結んだ海外の大学と創価大学との関係について考察し、第五章は「『学生参加』の挑戦」と題し、学生自治会、学生寮、学園祭などの大学行事の歴史をまとめている。第六章は「全体人間へのプレリュード――クラブ活動」として、学生が所属するクラブ団体について考察している。第七章は「〈大学〉の見える場所――39人が語る創価大学の30年」と題して、教員、卒業生、学生、大学職員等々が登場し、それぞれが創価大学に関して述べている。付録としては「創価大学歴史地図帳」という大学構内各所の歴史と案内、「年譜・創価大学」として1871年の牧口常三郎の出生から、2001年の『三十年誌』発刊直前までの詳細な年譜が記録されている。

以上、簡単ではあるが、『三十年誌』の具体的な項目を拾ってみた。たしかに多くの資料を用いた一般的な大学史とは、少々雰囲気も異なっているかもしれないが、学生から見た大学像がいたる所に記述されている。

創価大学における本格的な大学史は、この『三十年誌』が初めての試みであったということが、何よりその特徴を物語っている。学生が何とか自分たちの学ぶ大学の歴史を残そうと、開学以来の資料を徹底的に収集し、それを一冊の大学史として纏め上げた。学生が編纂したものが大学における主要な大学史に関する著作となっている例は、管見のかぎりでは発見できず、異例なことと言える (33)。

『三十年誌』がソフト面での大学アーカイブズに関する資料であるとするならば、以下に述べる「創価大学学生資料館」の開設は、ハード面の大学アーカイブズを学生が構築した具体例といえる。

「創価大学学生資料館」は、上で見た『三十年誌』の編纂作業によって収集された資料を、継続して活用していく機関として、創価大学学生自治会内に、2001年９月に開設されている (34)。この機関は、創価大学の学生の歴史に関する資料（大学行事、クラブ、寮、自治会等々）や高等教育の研究書等を学生のために収集し、保存し、利用する目的のために設置された (35)。創価大学自治会棟の地下一階の一室に設置されたこの資料館には、『三十年誌』を編纂する際に使用されたであろう、創立者の著作、草創期の学生自治会の議事録や新聞、行事でつかわれた小道具等々、多くの種類の大学アーカイブズが並んでいる。

なお、この資料館は、専門図書館機能、博物館機能、文書館機能を持つように構想されている (36)。大学の主体者たる学生が、学生自治という観点から、自らの手で自らの歴史を残すために大学誌を編纂し、その作業で収集した種々の資料を保存して、次世代へと継承していくために資料館を開設したと言えるだろう。

「創価大学学生資料館」開設後には、教育的活動や出版活動等も開始されている。教育的活動としては、資料館に携わり、今後も学生に関する記録資料を収集・保存・活用していくメンバーを公募し、約20名程度が集い、勉強会等を開催している。出版活動としては、これから述べる『学生自治会30年史　通史篇』を発刊した。

『学生自治会30年の歩み　通史篇』は、全38ページの冊子であり、序論として大学におけるアーカイブズの意義、編集方針、学生自治の今後の課題等が考察されている[37]。続いて「設立前史」と1972年から2001年までの学生自治会の歴史とが、一年ごとに考察されている。その特徴としては、創価大学三十年史編纂学生委員会による記述は序論においてのみであり、残りの一年毎の自治会の歴史は、全て何らかの資料を提示することによってのみ記述されていく点があげられる。用いられた資料は、『創価大学新聞』、自治会の機関紙である『Second Wind』、『自治会新報』、『デイリー新報』、学生自治会発行のビラやパンフレット、会議資料、学生自治会の活動方針案等々の学生自治会の発行物であり、「創価大学学生資料館」に所蔵されている資料を使用して、出版物を発行したといえる。

この『学生自治会30年の歩み　通史篇』の発行の意義は『三十年誌』同様に、学生自治会が自らの歴史を、自ら収集した資料によって編纂したという点にあると考える。その上で、「創価大学学生資料館」として刊行物を作成し得たということは、大学アーカイブズにおいて学生の持つ役割を考える際には重要であろう。

自分たちの大学の歴史を残したいと考えた学生が、資料を収集して保存し、後世のために活用していくというアーカイブズの流れを作りだし、『三十年誌』として編纂した。そしてその編纂作業を通じて、大学史資料の重要性が認識され、「創価大学学生資料館」の開設に至り、この機関の資料を用いて、学生自治会が自らの歴史を編纂して『学生自治会30年の歩み　通史篇』を編纂した。これらは、学生の手によるアーカイブズが具体的に誕生した、一つの事例であるといえるだろう。

以上のように、本節では大学アーカイブズを構築する際に、学生というものがどのような役割を担うことができるかを、創価大学学生自治会を取り上げて考察した。アーカイブズに興味を持つ学生が大学アーカイブズの構築へ関わることが出来れば、大学アーカイブズの資料収集においても教育活動においても、複数の視点を共有することになり、双方の視点を相対化することができる。そのように大学当局と学生とが、共に協力し合ってアーカイブズを運営し、資料収集や資料管理、研究を補い合って継続していくならば、その中に「教育」という営みが成立する可能性も存在するのではないかと考えるものである。

おわりに

本稿では、大学アーカイブズに関してこれまで余り注目されてこなかった、「学生」というものを考察の中心に据えることで、大学アーカイブズに関してわずかながらでも新たな視点を加えることを目的としてきた。その結果を要約すれば、以下の二点である。

第一に、大学アーカイブズ構築を目指す際には、学生が生み出すアーカイブズを考慮に入れなければ、一つの大きな視点が欠けてしまう恐れがあるのではないかということである。大学の中心者たる学生が、大学で生活して何を感じ、何を生み出したか。これについては、学生に関係する資料が語るべきところもあると考える。たとえ学生の描く大学史が通説とは異なっているとしても、そこには学生の立場でのみ見える歴史というものが存在し、新たな歴史の見方を提示する可能性もあり得る。

第二に、大学アーカイブズの教育的な機能を考えたときに、大学側が自校史教育や、講演会、展示活動を行って学生に大学に関する知識を伝達していくのは当然大切であるにしても、それのみが目的になっては大学アーカイブズの役割を矮小化することになりはしないかということである。あくまでも知識というものは、自分が大学に学ぶ意味や、大学という存在に興味を持

つための手段である。まずは学生が、大学アーカイブズの意義を考え、その構築の当事者となること、これが何よりも教育的であると考える。

以上の考察から見えてきたものは、「学生」という視座に、大学アーカイブズの持つ機能を十全に活用していく糸口が潜んではいないか、ということである。先に検討したように、大学アーカイブズにおける大学史編纂や「教育」的機能が、一つの大学の利害に偏らないものになることを期待されつつあることを考えると、「学生」という視点は一つの有効な役割を担う可能性があるからである。そのような視点に立ったとき、今後も大学アーカイブズが「教育」的な機能を持つことが重要視されるのであるなら、大学における研究主体としての教授者と研究成果を受け取る学生との関係について考察することも、あながち無駄ではないだろう。なぜならば、研究成果の発信や「教育」というものが行われる場合には、そこに「教える人」と「学ぶ人」との関係（このように二項対立的に捉えること自体に、すでに問題は潜んでいるのかもしれない）が自然と設定されるからであり、この関係性についてよくよく注意しなければ、教育というものが、受け手におかれる学生にとって無意味なものになる可能性も否定できないからである。

そこで最後に、大学アーカイブズを考える上で補足的に検討してみたいのは、大学の将来に関して極めて話題を呼んだ作品とされる、ビル・レディングズ『廃墟のなかの大学』で提起されている内容である。レディングズは、「国民国家のため」の役割を終えて「超国家的な企業体」を目指しつつある大学というものが、教育実践を管理運営の論理に結びつけている現状を指摘し、この状況を緩和するべく「教授法」の問題を考察している。この文脈においてレディングズは、従来の大学教育のあり方が乗り越えていなかければならない、大学における教授者と学生との関係が内包する問題点について、以下三点を摘出している。突然の長文の引用となり、ためらわれる感もあるが、大学アーカイブズを考察する上で示唆する点も多いと考えられるために、あえて引用する。

> 「ソシュールが唱えるコミュニケーションのモノローグ的モデルと、バフチンのダイアロジズムの違いは、教授法に関する議論ではそれほど意義はないと思われるかもしれない。しかし、実際にはそれは、自律性に対する見当違いの教育的関与についていろいろなことを語りかけ、教授法との関わりに付随する三つの落とし穴を理解――あるいは回避――するのに一役買っている。その第一は、教授者を絶対的な権威者とし、学生たちを、すでに作られた、疑いのない知識の伝達を受け入れる多くの容器としてしまうヒエラルキー。次に、教育実践は、教師と学生の間に何らの違いも生み出さないとする主張、つまり、学ぶべきものは何もないことを示唆するいわばデマゴギー。第三は、教育をテクノクラートの育成と訓練――訓練の目的とか、機能に少しも疑念を挟まず――に還元してしまうこと。これら三つの落とし穴はすべて疑問を挟むことに終止符を打とうとする。とりわけ、第一と第三のものにそれが最も明白である。しかし、もっと油断がならないのは、第二である。そこでは思考が疑問視されるというよりも、犠牲にされている――というのも、まさにそれは、偏らない平等主義という仮説を疑問視する可能性があるからである。」(38)

レディングズが、大学における教授と学習とに関して語る「三つの落とし穴」は、大学アーカイブズにおける史料編纂・収集活動や教育活動にも当てはまる批判ではないだろうか。即ち、第一に学生に知識を伝達するのみに終始してしまうという批判、第二に学生は勝手に学ぶ自律性を持っていると考えて、何もする必要はないという批判、第三には大学の目的のために学生を管理し、目的達成の手段としてしまうという批判である。大学アーカイブズが、学生の「疑

問を差し挟むこと」に対して「終止符」を打つことになるなら、何のための大学アーカイブズであろうか。

大学アーカイブズにおける「研究」及び「教育」は、大学の「アイデンティティ」といった大学設立側の意図を学生に押し付けるものであってはならないだろう。大学アーカイブズは、あくまでも大学に学ぼうと集った人達が共に思考しながら、身近な自分の大学を知ることから出発して、そこから社会における大学の存在価値や、学生としていかに学ぶのかということを、自分の中で再構成する場に他ならないと考える。

※　本稿は、国文学研究資料館史料館主催・平成16年度アーカイブズ・カレッジに提出した修了論文を、縮小・修正したものである。本文中の下線・傍点は、全て筆者による。

（注）

（1）『全国大学史資料協議会東日本部会会報　大学アーカイヴズ』No.31（2004.10）９頁。

（2）ハスキンズ著、青木靖三・三浦常司訳『大学の起源』（社会思想社、1977）18頁。

（3）同上、19頁。

（4）全国歴史資料保存利用機関連絡協議会監修、文書館用語集研究会編『文書館用語集』（大阪大学出版会、1997）77頁。

（5）大西愛（代表）編『アーカイブ事典』（大阪大学出版会、2003）76頁。

（6）寺崎昌男・別府昭郎・中野実編『大学史をつくる――沿革史編纂必携』東信堂、1999、203頁。

（7）同上、205頁。

（8）寺崎昌男「私の大学アーカイヴス論――回想・状況・意義――」（『紫紺の歴程　大学史紀要』第５号、2001）35頁。

（9）同上、36頁。

(10) 同上。

(11) 同上、37頁。

(12) 注５に同じ、76頁。

(13) 同上。この著作に掲載されている「朝日新聞」2002年10月22日の朝刊によれば、九州大学では「九州大学の歴史」(97年度)「大学とは何か」(99年度）といった講義が行われている。立命館大学では2000年の創立100周年から「日本近現代と立命館の100年」と言う講義を開始している。

(14) 注８に同じ、37頁。

(15) 京都大学大学文書館ホームページより。http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html (2005年１月現在)。

(16) 全国大学資料協議会西日本部会編『大学アーカイブズの設立と運営』（全国大学資料協議会、2002）58頁。「１．大学基盤施設としての大学アーカイブズ」として「諸外国、とりわけ欧米の伝統ある大学では、大学の基盤施設として、図書館（Library)、博物館（Museum)、とならぶアーカイブズ（Archives）の設置が常識的に行われている。これに対して、日本の国立大学では図書館および博物館の整備は進んでいるが、アーカイヴズの整備に至ってはまったく行われていない。」「大学アーカイヴズは、主に文書史料の収集・管理・活用を通じて、その大学の存在・活動を歴史的な視覚から実証するさまざまな活動を支援する機能を有している。しかも、大学アーカイヴズが有する支援機能は、当該大学の構成員は当然のことながら、学外の一般市民にまでおよぶ点できわめて汎用性が高いものである。したがって、大学の基盤施設の１つとしての大学アーカイブズの整備は、情報公開社会における開かれた大学として時宜を得たものであるといえる。」とある。大学におけるアーカイブズは、大学のみならず広く社会一般に貢献すべきものであるという指摘は重要であると考える。

(17) 同上、59頁。「２．各種アーカイヴズの中核的拠点としての大学アーカイヴズ」に関する説明としては、「平成13年９月に大学史資料室が開催した公開シンポジウムへの参加者に対する事後アンケートの結果を分析すると、大学アーカイブズに対して寄せられた期待が少なくとも次の２点であることが明らかとなった。第１に、主に文書館関係者から寄せられたものとして、大学アーカイヴズに関する理論的・実践的研究成果が、地域にある文書館等の活動にフィードバックされることに対する期待である。第２に、大学が保有する文書史料群が地域社会ならびに地域住民にとっても有用であるとの認識から、その情報発信あるいは公開に対する期待である。とりわけ前者の期待に関しては、アーカイヴズ機関そのものを研究対象とする大学アーカイヴズは、地域文書館等との交流によって中核的拠点としての存在意義を十分に発揮できるものと考えられる」とある。

(18) 同上、59頁-60頁。

(19)『関東地区大学史連絡協議会会報　大学アーカイヴズ』No. 8（1993. 3）、８－９頁。

(20) 木村礎（明治大学元学長・名誉教授）「2001年10月３日全国大学史資料協議会2001年度総会ならびに全国研究会・記念講演」「大学史および大学史料を考える」（『大学アーカイブズ　第29号』2003. 10）。この講演は、これまでの大学史に収まりきれない大学アーカイブズを構想する必要があると思わせてくれる内容と言える。以下にその一部を引用しておく。

「それから学生。これまでの大学史は学生の事あまり書かないんです。もっぱら大学内部のことばかり書いている。本学は偉いんだとか。そういう風な事はやめたほうがいいって事です。学生と教師がいなけりゃ、学校なんかないわけですから、という事。」

「それから、騒動や紛争。こういうものを避けてはいけない。そういう事のない大学って、100年を過ごした大学なんて、平穏無事に100年を過ごした大学なんて日本にありません。事実問題として、立派なことばかりがあった大学なんて一つもありません。くだらん事もある。たくさんある。だいたい大学だけがそうではない。日本だってそうだ。人間だってそうでしょ。立派なことばかりで過ごして、90歳まで生きた人なんてほんとにいるのかと。わたしは77歳ですけれども、ちっとも立派じゃない。そりゃもうよくわかる。だいたいそんなもんなんです。そういうものが統合されて、生きているのが一つの組織体であり、人間である。そういうふうに考えないと考え方が未熟だという事になる。未熟すぎる。子供ではない、という事です。」（７－８頁）

(21)「創価教育研究センター規程第２条」（目的）・同「第４条」（事業）、『創価大学規程集』（創価大学事務局、2002）891頁。

(22) この課題に関しては、韮沢賢一「創価教育研究センターにおける大学アーカイブズ機能と課題」（『創価教育研究』創刊号、2002）において詳しく考察されている。

(23) 神立孝一「創刊にあたって」（『創価教育研究　創刊号』、創価教育研究センター、2002）1頁。

(24) 同上。

(25) 韮沢は前掲の論文において、創価教育研究センターのアーカイブズ機能としては（１）史料の収集と整理、（２）史料の保存と利用、（３）研究成果の公開、（４）展示活動、（５）講演会の開催、（６）年史編纂事業をあげ、今後の課題としては（１）アーキビストの養成、（２）規定類の作成・整備、（３）大学の自己点検・評価」とアーカイブズ機能のかかわり、（４）教育活動としての自校史への取り組み、（５）デジタル・アーカイブの対応、をあげている。

(26) 創価大学三十年誌編纂学生委員会『創価大学三十年誌〔学生編〕』（創価大学学生自治会発行、2001）、390頁。

(27) 同上、264-287頁。

(28) 同上、282頁。

(29) 学生の発行による創立者スピーチの全15種類は、『創価大学三十年誌〔学生編〕』の「創立者の語らいの書誌学」（282-287頁。）を参照されたい。

(30)『創価教育研究　第３号』所収、「創価教育研究センター所蔵 池田大作著作翻訳出版目録（１）」に

よる。英語への翻訳として1978年に、*Toward the 21st century*(Soka University Student International Center）が、1987年には、*Proposals for the 21st century: Collected addresses*（Soka University Student Union）がそれぞれ発行された。韓国語版は2002年に『創立者는 말한다』（創韓會発行）として作成されている。日英対訳版は、『対訳創立者の語らい』（創立者の語らい日英対訳版編纂委員会、2004）として、上記の目録完成後に作成されたために目録には掲載されていないゆえ、創価教育研究センター所蔵の書籍を参照させて頂いた。

(31) 注26に同じ、７－８頁。

(32) 創価大学三十年誌編纂学生委員会『自治会30年の歩み　通史篇』（創価大学学生自治会、2002)。

(33) もちろん、学生が大学の歴史を記述することに関しては、問題がないとは言えない。その課題を、創価大学30年誌編纂委員会は「『史』と『誌』――『創価大学三十年誌』をめぐって」という誌上座談会において取り上げている。（創価大学30年誌編纂委員会編の雑誌『ROUSE』20号、2001年、９頁。）そこでは、学生が大学史を編纂することが稀であるということを述べながらも、本来大学の歴史そのものが学生の歴史であること、学生は本来その研究対象であるということ等に関して議論が行われている。「大学史」ではなく、「大学誌」というタイトルにした理由については、「学生は恒常的なスタッフではないのです。だから、一応それが読み物として完成するという決着が必要でした。」と述べられている。このように、学生が大学アーカイブズに対して、新たな視点をもたらす可能性はあるかもしれないが、一方で当然のことながら、その限界性も理解しなければならない。だが、大学史という研究対象には、大学に生きた学生や教員、また大学に所属していない人間等々、複数の視点を用いながら、迫っていかなければならないと考える。

(34) 注26に同じ、489頁。

(35) 注22に同じ、42頁。

(36) 坂口貴弘「創大生アーカイブズの現在」（創価大学30年誌編纂委員会編『ROUSE』21号、2001年10月16日）18頁。「創価大学学生資料館」に関しては、坂口貴弘氏から多くのご教授を賜った。ここに、深く感謝申し上げる。

(37) 注32に同じ、２－７頁。

(38) ビル・レディングズ著、青木健・斎藤信平訳『廃墟のなかの大学』（法政大学出版局、2000）212-213頁。